

# 玉川教会たより

NO. 483  
 2016年5月15日  
 町田市玉川学園4-5-32  
 TEL. 042-732-9321  
 FAX. 042-732-9337  
 Eメール chiyosi514@yahoo.co.jp

6月17日礼拝説教抜粋

【確信は心の内に】

ローマ14:10~23

▼まず、14章の1節以下の弱い者という表現は、本来は、無力、弱い、病弱などの意味です。しかし、ここで、信仰の弱い者とは、宗教的な規律に拘泥する者、厳格にこれを守る者の意味で、現代人の感覚とは180度違っています。食べるなどが、形に拘って己を律していなければ信仰を全う出来ない弱い者という意味で用いられています。ですから、これらの人を退けないで受け入れてあげなさいというのは、二重の皮肉になっています。

▼10節。「それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです」

「兄弟を裁く」の兄弟とは、禁欲派の人のことであり、パウロに言わせれば、信仰の弱い者のことです。しかし、現代の感覚で言ったならば、全く逆で、ファンダメンタリストとかオーソドックスということになり、熱心な人、むしろ熱狂的な人ということになると思います。

▼「兄弟を侮る」のは自由派です。「信仰の強い者」となりますか。勿論、現代の感覚で言えば、宗教色が弱くなった世俗的な人になります。使徒パウロは、この人々をも肯定していません。むしろ逆です。両者に対して皮肉を言っているのです。



▼10節の後半部分。「わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです」

そのままズバリ、神の裁判席の前に（被告として）立つという意味です。ここでは、終末の裁きを前提としています。キリスト者は神の裁きの前に立つことを自覚する者です。つまり、自分が神の前の罪人・被告人であることを自覚する者であって、告発する側に立つ者ではない、と強調されています。

▼12節。「それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです」口語訳では、「神に対して自分の言い開きをすべきである」。ここでも、終末の裁きを前提としています。人間は、誰でも、神の裁きの前に立つべき存在であり、他の人間を裁くべく裁判官の側、つまり、神の側に立つべきではないと言われています。

▼初代教会に起こった、食べ物を巡る深刻な対立に、目を向けなければなりません。その時に、矢張り、10節の後半が重要になって来ます。

「わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです」

私は、牧師という立場上、皆さんとは逆の方向を向いています。これは根本的に間違っているのではないかと思うことがあります。ややもすれば、牧師だけは、十字架に背を向けているのです。神さまの方を見ないで、一人だけ聴衆の方を見ています。本当は、会衆席に立って、十字架を見ながら礼拝を信仰する方が良いのではないかと思うことがあります。そんな話を仲間内で致しましたら、十字架に背を向けるのは当然ではないか、背を向けなければ、それを担ぐことなど出来ないと言った者がありました。

一理あるといえば一理ある。詭弁と言えば詭弁です。

→ 2頁へ

→1頁から

▼私たちは賛美し祈るために教会に集まります。他の目的のためではありません。つまり、一番簡単に言えば、人の顔を見るためではない、人の話を聞くためではない、勿論、人に顔を見せるためではない、人に話を聞かせるためではない、神さまにお目にかかり、神さまの言葉を聞くために、集まるのです。この一番肝心なことを忘れると、どうなるのか、それが、今日の箇所の問題なのです。

▼つまり、人間が十字架を見上げることをしないで、お互いの顔を見るようになると、どうなるのか、そう言うことです。楽しいことも沢山あるかも知れませんが、結局は、裁き合うようになるのです。悲しいかな、それが人間の罪の現実です。

▼私たちは賛美し祈るために教会に集まると申しました。他にはないと言いましたが、もう一つあると言えばあります。他にはないと言いましたのは、これも厳密には、賛美し祈ることの一部分だからです。

それは、懺悔、悔い改めです。罪の告白です。罪の告白と無関係な信仰の告白はありません。そして、信仰の告白と無関係な、賛美や祈りはありません。

その意味で、教会の営みの全ては、十字架の死を見上げることに始まるのです。

▼10節で強調されていることは、十字架の死を見上げることです。私たち人間は、誰でも、十字架の前で罪人であり、平伏して十字架の死を見上げるべき存在なのです。

その意味では全然特別な存在ではなく、この世の罪人の一員なのです。ですから、病や貧しさに苦しむ者と共にある教会とか、彼らのために何が出来るかとか、そんなご大層なものではなくて、自分が、十字架の死を見上げて、罪を告白する存在なのです。

世に仕える教会と言うと、如何にも立派で信仰的に聞こえますが、仕えるなどという言い方が、自己理解が、既に傲慢かも知れません。私たちは、世の一員であり、罪人の群れであり、十字架の死を見上げて、罪を告白する存在なのです。

▼13～16節は、10～12節の説明で申し上げたことで充分です。

一つだけ強調したいのは、13節です。

『従って、もう互いに裁き合わないようにしましょう。むしろ、つまずきとなるものや、妨げとなるものを、兄弟の前に置かないように決心しなさい。』

著者の意図とは違うかも知れませんが、ここの、場面を思い浮かべて下さい。十字架があって、その前に、二人の人間がいます。そして二人共に、十字架を見上げています。二人の前には、他に何もありません。二人の内一人が、他の視線を妨げてはならないのです。進み行く道をふさいではならないのです。そして、十字架の前に、何も置く必要はないのです。

▼現実には、良かれと置いて置いた様々な大道具小道具が、十字架を見上げる視線を遮り、十字架に進む道をふさいでしまっているのです。

私たちが努力すべきは、十字架に至る道を飾り立てることではありません。むしろ、真っ直ぐに十字架に至るように、何も置かないことなのです。

これは、品物のことだけを言っているわけではありません。他の色々なことです。



※. 個々に掲載したのは、説教の抜粋です。毎回の礼拝で、希望者には完全原稿を配布しています